

〈〈焦点5〉「当事者として感じ、語らう」の再考〉

立場性でのゆれ

—人間として，専門職として，ピアとして，当事者として—

石井秀和*

*社会医療法人平成記念会 平成まほろば病院

Different Perspective by Different Social Status: as a Person, as a Professional, as a Peer and as a Tojisha

Hidekazu Ishii *

* Social Medical Corporation Heiseikinenkai Heiseimahoroba Hospital

キーワード	
ナラティブ	narrative
当事者	tojisha
専門職	profession
ピア	peer

I. 出会い

私が今大会の大会長である梓川先生と出会ったのは3年前、特定非営利活動法人奈良難病連が主催した「難病ピアサポーター養成講座」に参加したときである。初回の講義の中で出てきた「ナラティブ」や「当事者」という言葉が心に残り講義の後、梓川大会長へ私の想い（難病を発病してからなぜ今の仕事をするようになったのか。患者会への葛藤や難病ピアサポーター養成講座参加への思いなど。）をぶつけてみた。すると梓川大会長から「専門職として働きながらピアカウンセリングをすることは切り替えが難しいかもしれない。」と言われた。その時は何となく理解できたが、スッキリしなかった。この講座に通い続け、実際にピアカウンセリングを行うことでスッキリとした「答え」が出てくれれば良いなと思った。

明確な「答え」が出ないまま、2年前に開催された「難病ピアサポーター養成講座修了生スキルアップ研修会」の最終日に梓川大会長と再度話をする機会を頂き、専門職として健康障がいをもつ本人として「第34回日本保健医療行動科学会全国大会」

の実行委員になって手伝ってほしいと依頼された。大会ポスターをもらい、大会の主旨を聞き、この大会を通じて自分の中で納得した「専門職として働きながらピアカウンセリングをすることは切り替えが難しいかもしれない。」に対する「答え」が出るのではないかと思い、実行委員として参加したいと希望を伝えた。

II. 実行委員

学会に入会することも、学会の全国大会に実行委員の一員として関わっていくことも、初めての経験であり、昨年2月に実行委員会へ初めて参加した時の緊張と不安は今でも覚えている。アットホームな雰囲気に救われ、大会テーマ「当事者として感じ、語らう」は何か1つの答えを求めるのではなく、参加者1人1人が何かを感じてもらい、帰ってもらえたらよい、最終的にどう行き着くかはやってみないと分からないとの話もあり、少し気が楽になり、続けていくことができた。しかし、途中からの実行委員会加入であったため、ある程度の内容や役割が決まっていた中で自分のできることは何かあるのか、

大会規模の大きさに不安が募り、積極的に関わることができないまま、大会に向けての準備や当日のスケジュールが少しずつ出来上がっていった。5月の実行委員会にて見るにみかねたのか、叱咤激励か、担当割り振りを行なってもらえたため、私のやるべきこと役割が決まった。積極的になれなかった私に役割を与えてくれたことに感謝、やっと実行委員の一員になれたと実感した。

6月の実行委員の集まりの帰りに梓川大会長から「専門職として働きながらピアとしての活動も行う人の中で続く人はなかなかいない。石井さんはなぜ続けているのだろうか？」との問いかけがあったが、自分の中で「これ」といった確証のあるものがなく即答できなかった。この問いかけに対する「答え」も今大会が終わった後に、梓川大会長へ話ができれば良いなと感じていた。

大会前の準備物については、指導やアドバイスをもらいながら作成し、当日の役割を時系列にして表にまとめ、頭の中でシミュレーションを行なった。また、ファシリテーターとして参加するワークショップの打ち合わせも他の実行委員に時間を作ってもらい行うことができた。

大会前日準備物の最終確認を終え、後は大会当日を待つばかりとなった。大会当日はワークショップのファシリテーターとしての関わりはあるが、基本的には講演や演題で使用するパソコンなどの物品管理や設置、シンポジウムの準備など裏方がメインであるため全体像として表から大会を見ることはできないが、実行委員になれたからこそ、裏方にしか見えないものも沢山ある「私にしか見えない景色」これを楽しもうと決めた。

Ⅲ. 大会当日

大会1日目、会場の奈良春日野国際フォーラムへ到着。会場の扉が開く前に物品の搬入とボランティアを含めた最終打ち合わせを行なった。事前にシミュレーションを行っていた自分の動きをイメージと照らし合わせた。会場がオープンしてから開始までの時間がなく、皆打ち合わせ通り準備を行なっていく。私はまず、理事会で使用するパソコンの設営に向かった。会場担当者とも打ち合わせをしてい

たためスムーズに設営完了。ここにきて理事会参加者が迷っていることに気づいた。案内板を準備していなかったため急遽部屋の前に準備していた案内板を廊下へ移動し、会場へ誘導することにした。開始時間になり無事、理事会が開催された。実際に大会が開催されて細かな詰め甘さに気づいた。他の実行委員に相談し臨機応変に対応していくことができた。実に心強い仲間である。

大会の開会式から能楽公演へ、能楽公演は今大会の目玉でもある。私も楽しみにしていた。ただ実行委員としてこの時間に一般演題の準備をする必要があり、各会場へのパソコンの設営と机や椅子のセッティングを行なった。会場設営後、プロジェクターの設置や各パソコンのパワーポイントと資料の相性チェックやポインターの使用確認を終えたのは一般演題開始間際だった。結局、能楽を見ることができず、能楽を見た方からは解説もついて良かったと話があった。能楽を見るができなかったのは残念であるが、無事に一般演題が開始された。これも実行委員ならではの体験であると実感した。

午後からの基調講演前にパソコンの設営とデータのチェックが終了し、基調講演である大会長の話に聞き入った。内容は割愛するが、梓川大会長自身のナラティブについて語りがあり、話す内容もさることながら、その口調に梓川ワールドに引き込まれた。テーマ「当事者として感じ、語らう」ということはまさに「この語り」なのだと感じた。

シンポジウムでもパソコンの設営と各シンポジストのデータのチェック、机と椅子の設営を行なった。基調講演と同じ能楽ホールでの開催であったため、予定では15分のインターバル中に準備を行う必要があったので大変だった。シンポジストがどの位置から話を行うかをこのタイミングで話し合ったため、少し時間を押してのスタートとなってしまった。こういうところまできちんとイメージをする必要があったのかと反省しつつ良い経験になった。シンポジウム中もあれこれと動き回っていたため、会場の雰囲気の中でリアルタイムに話をほとんど聞くことができなかった。気持ちに余裕がなく無駄な動きも多かった1日目であったが片付けも終わり無事終了となった。ところが、昼ごろから少しずつ両股

関節の痛みが強くなった。帰るときにはまともに歩行することができなくなった。2日目への不安が募る。皆に迷惑をかけたくないと思った。

2日目の朝、両股関節の痛みは軽減されていたので、何とかかなりそうだと思った。会場に到着、スタッフは皆、1日目を経験しているためか段取り良く準備を進めていた。私は一般演題が行われる2会場でパソコンの設営と演者のデータのチェックを行なったが、1日目のおかげで会場のイメージとパソコンの設営にも慣れたためスムーズに準備ができた。一般演題が開催中にわかちあいワークショップの準備に取り掛かる。一般演題の2会場でも引き続きワークショップを開催するが、残り1会場となるレセプションホールは、これから閉会式まで使用される2日目のメイン会場である。レセプションホールで開催されるワークショップは私もファシリテーターとして参加する会場であるため、積極的に準備に介入した。また、個人的には一般演題終了後からワークショップまでのインターバルで1会場のパソコンを撤収する必要があった。一通り準備ができたので最終確認を行なった。事前に何回も打ち合わせを行なっているのでイメージはできている。参加者には、昨日今日と会場で感じたものも含めて今の想いを素直に話してもらえるような環境を作ることに徹することにした。

一般演題が終了したため、直ぐに1会場からパソコンを撤収し、レセプションホールへ戻り、参加者の出迎えを行なった。私のグループでは1人欠席したが予定通りワークが始まった。専門職として感じ語ろう！というテーマで5つの題について語り合った。最初に発表者と書記を決めてから、まず一つ目の題である「専門職であるあなたの一番の悩みは」について話し合った。とりあえず私の右の人から順に反時計回りに話をすすめてもらうことにした。ファシリテーターとして話が逸れた時に介入しようと思いながら見守っていたが、この後の題も含めて全ての題で介入する必要もなくワークを進めることができた。私の右から反時計回り話をしてもらうことが良い風にハマったからである。皆このワークショップには希望して参加をされていたので各題への発言は積極的に行なってくれた。そして最終発

言者（私の左隣）が各題ともに他の参加者の想いも汲み取り自分の意見も取り入れながらまとめてくれた。私だけでなく皆しっくりきていたのだろう。2つ目以降の題でも、自然と同じような流れになった。ただ最終発言者が負担になっていないかと心配したが、負担ではないとのことだったので見守ることにした。私と同じ悩みや違う悩み、専門職として対象者と同じ向き合い方や違う視点での向き合い方、健康障がい有する方や家族の立場の方に伝えたい事でも同じ意見や私には思いつかない様な意見が出てきた。こうなると楽しくて仕方がない。このまま時間が止まってくれたら良いのと思えたワークであった。

ワークショップが終わってホッとしたのか、1日目に両股関節を痛めていたが、落ち着いていた痛みが強くなり、我慢しながら動いていたところが限界にきたのか、それ以降の記憶がほとんどなく、指示された通り、各プログラムの準備や片付けを行なっていたことは所々で覚えがあるが繋がっていない。はっきりと記憶に残っているのは大会終了後控室に戻ってからの事である。皆やり切った感を持って控室に居ることは顔をみれば直ぐに分かった。この2日間、自分のできることに対して全力で走り続けた結果、最後までパワーが持たず、どれだけ貢献できたのか分からない。ただ実行委員のメンバーに出会えたこと、私自身初の学会の全国大会参加が実行委員としてであったことの経験は私の財産となっている。

IV. 当事者だった

この大会を終えたとき、一人の知り合いが「石井さん。この大会に参加して自分が『当事者だった』ことを思い出したよ。ありがとう。」と言葉を真っ先に私にかけてくれた。

「私は、幼少期に健康障がいのため、入退院を繰り返して院内学級にも通っていた。今も幾つか日常生活でのハンディキャップがある。しかし、この大会に参加するまで、自分が健康障がいの『当事者』であることを実感していなかった。忘れていた訳ではないのだけれど。」と大会の感想から、自分のナラティブを語り出してくれた。

「院内学級にいた時の記憶は、今でもはっきりと覚えていて、みんな病気と闘い、そんな中でも笑顔に溢れていた。全員が全員、病気との戦いに勝ったわけではない。私は、負けたとは思っていないけれど、今の時間を一緒に過ごせない戦友は何人もいる。当時の私は、彼ら彼女らの分まで精一杯生きようと誓っていた。『私が生かされた意味が必ずあるはずだ。彼ら彼女らとの思い出に恥ずかしくないように生きよう』と。そんな事を5～6歳の時に思っていた。それからは幸いなことに、ハンディキャップがあるものの日常生活を過ごすことができていた。このハンディキャップも生まれた時から当たり前の様に自分の側にあるもので、特に意識することもなく過ごしていた。ある意味、私は、自分が当事者である事を過去のように感じて、日々過ごしていたのだと思う。20数年前の誓いを忘れたことはない。しかし、その誓いを毎日思い出し涙にくれることも無くなっていた。きっと私は、今も健康障がいの当事者と言われる部類には入るかもしれないが、自分自身の中では、『当事者だった』と過去形になっていたのだと思う。そして、そんな自分が『当事者だった』と過去形にしている事すら意識せずに今まで生きてきた。この大会に参加して、自分が『当事者だった』と過去形にして過ごしていることに気づくことができた。そして、当事者として感じ語らうことによって、忘れることもないが、思い出すこともなかったあの誓いが想起されました。『当事者だった』人も当事者なんだと思った。同じ苦難や苦悩を持った心が通じあった仲間と分かち合った時間、支え合い、この支えあった関係性に救われたことに再度触れることができた。この大会に参加できて本当によかった。素晴らしい大会を共に過ごせてありがとう。」

私は、この話を聞いて「この様な考え方もあるのか」と感じた。私も難病患者として、今は寛解状態であるため通院で定期的な点滴治療と投薬で日常生活を過ごしているが、過去に病気で苦勞した話を笑って話せている自分がある。聞いている人がよく「なぜ笑って話せるのか。」と質問されることがある。今にして思えば「過去」になっている、彼の言う「当事者だった」になっているのかもしれない。

V. さいごに

この大会を通じて私は最初に述べたスッキリしなかった「答え」が出たような気がする。私は、「専門職」としての患者・家族への関わり方と、「ピアカウンセラー」としての患者・家族の関わり方で「切り替え」をしていなかったのだということが分かった。その人の物語を知り、次にどの様な物語を紡いでいってもらおうのかという手法を私は使い分けをせず、支援の中に取り入れている。「石井にしかできないこと、石井だからできること。」専門職として患者・家族と関わる時、時々同僚や患者・家族から言われる言葉である。

「切り替え」をすることが正しいことなのか正直分からない。全ての人当事者であるならば、そもそも「切り替え」を行う必要などないのではないか。「石井だから切り替える必要がない。」と言ってくれる人もいる。今まで深く考えずにやってきたことに対して考えるきっかけをくれ、実行委員のメンバーと出会うきっかけをくれたこの大会に感謝し、一人の人間として専門職としてピアカウンセラーとして当事者として「石井にしかできないこと、石井だからできること。」を追求していきたい。